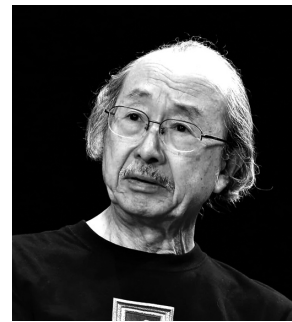


回顧：海を渡って“半世紀前の NY 赴任”②



西山 慈恩*

前回①で LA 到着までを書いた。赴任先は NY だから今回はそこから赴任先で仕事を始めるまでのことになる。

LA 空港で迎えに来てくれた先輩と預けた荷物が出てくるのを待つまでの会話がどんなものであったかの記憶は失っているが、初対面であった彼を、現地で働く日本人の先輩としてまぶしく見たという記憶は今も鮮明である。

当時のスーツケースにはキャスターは付いていなかったから、スーツケースと共に空港の建物を出た所で、先輩が車を回してくるのを待った。一人になって見上げた空は雲一つなく晴れ渡っていた。ホノルルで既にアメリカ入りしていたのだが、前回記したように慌てふためいていたからそこでは初めての外国入りを味わうという余裕が無かったが、LA での青空を目にして名実ともにアメリカに降り立ったことを思い、南カリフォルニアの爽やかな空気の中で、幼少時に鬼畜米英と呼んだ国、敗戦直後にジープで現れ子供たちにハーシーチョコレートを投げた兵士の国、大学時代にアメリカ

帝国主義と批判していた国、で働くことになったことに思いをはせた。

スーツケースをトランクに入れ、先輩が車の右側の前ドアを開けて乗車を促した。乗ってその大きさに驚いた。ゆったりとした幅と奥行き、日本をたつ前に友人が給与の何十倍もの金を払ってうれしそうに乗っていた車に乗せてもらったことがあったが、パブリカというその車は4人が肩を寄せ合っただけで、697cc 空冷2気筒のエンジンは上り坂になるとあえぐような感じでノロノロとなっていたから、まるでマイクロバスではないかと思われた。先輩が左側から運転席に乗り込んだ。運転席が左、違う世界に来たなと実感した。その車は、シボレーのインパラという車種で、支店で社員が日常の仕事に使う社有車であった。

空港を出て San Diego フリーウェイを北上しほどなく Santa Monica フリーウェイに流れのままに乗り、左手にハリウッドの丘を見ながら東に向かう車中で感じたのはこの国と22年前まで戦争をしていたということの無謀さであった。

* 丸紅株式会社（定年退職） J.Nishiyama 連絡先 E-Mail アドレス : jion13381008nishiyama@gmail.com

用意してくれていたホテルは支店のあるダウンタウンのはずれの Stillwell Hotel で、当時は日本からの来訪者はそこに泊めるのが通例であったようである。ビジネスホテルという呼び方は、当時はなかったが、要は安宿であった。(この小文を書くに当たり、今はどうなっているかと思い Google Map で検索してみたら、驚いたことに建て替えられることもなく今もあり、近辺のホテルの中で最安値が表示されている。(838 S Grand Ave. / 写真参照)



機中で仮眠したことや時差の関係もあったが、興奮していたのだろう米国本土での最初の夜の寝つきは悪かった。翌日、早々と起床し、朝食はホテル内のレストランで摂った。安ホテルであったからレストランというより Coffee shop というものであったかもしれない。上記した現在の写真では Café なる看板が今は出ている。今なら American breakfast ということで Coffee とクロワッサン等で済ますところだが、「外国だ、腹ごしらえはしっかりして」とメニューを見てハムエッグを注文した。出てきたものを見て絶句した。厚さ 1 cm にも及ぶハムがドレット皿に乗っていてスクランブルエッグが添えられていた。想定していたのは厚さ 1 mm 位で直径が大きくても 10 cm 位の円形のハムの上にスクランブルエッグが乗っているというものであったから間違えたのではとおもったが、Ham であることはまちがいになかった。……メニューの表記がどうなっていたのか記憶はないが、Ham と Egg という単語を頼りに、日本のそれを想定していたが、今から思えばハムステーキを注文したことになったのだろう。小柄な東洋人が朝からハムステーキとは？ と注文された方は思ったに違いなかったろう。

NY 空港は暗殺されたケネディ大統領を讃^{たた}えて 1963 年 12 月に John F. Kennedy International Airport と命名されていた。暗殺されたのが、同年 11 月 22 日だから、やるのがなんとも早い。着陸前にマンハッタンの摩天楼が見えるに違いないと期待していたが、下に見えたのは湿地帯のような入り江であった。今思えば、見下ろすタイミングが遅れて、空港の南に広がる Jamaica Bay が見えていたのである。

空港には当面の上司となる先輩が迎えに来てくれた。Buick の Skylark 2 Door-Hardtop、日本ではほとんど見かけることのなかった車体の色は白の鮮やかな個人所有車だった。彼は子供が無くて奥さんとの二人であったから 2 Door 車としたようだが、サイド・ウィンドウが広々としていたのは珍しかった。

空港を出て、Van Wyck Expressway に乗り更に Long Island Expwy から西に向かうとマンハッタンの摩天楼が見えて来た。



今は東京もそのようなビルが乱立しているから、驚くこともなく、感動もなかろうが、正に初めてみる摩天楼であった。当時、世界一の高さを誇ったエンパイアステートビルそしてクライスラービル。そして当時赴任する会社が入っていた PANAM ビル。

ホテルは 97th St. and West End Ave. の The Hotel Paris であった。当時、仕事で NY 入りした邦人は、ほとんどがここだった。なぜなのか質したことはないが、900 室もあり室料もそこそこ安かったことから、予約しやすかったのではないか。建物としては由緒あるものであったようで、所有者が何度も変わり、1980 年代に Rental apartment になり現在は Condominium になっていることがネットで調べたら判明した。

翌日の出社は、正真正銘に外国の地に一人で歩き出すことだった。空港で出迎えホテルに送ってくれた先輩が車の中で、地下鉄の乗り方を教えてくれてはいた。

ホテルから1ブロックを歩いたらどうかSubwayの表示のあるところから階段を地下に降りて行くと薄暗い中にプラットフォームがあった。ホームへの入り口は硬貨のようなtokenと呼ばれたものを挿入するとバーが動いて一人が通れるようになっていて、その近くにおり檻のようなボックスがあり、大柄の黒人がその中からtokenを販売していた。



token

1ドル紙幣を出し、“Five please!”それが、先輩が教えてくれていた言葉であった。当時1乗車20セントであった。Tokenを入手する会話、なんと簡単なことか。先輩の教えがなかったら、日本で慌てて学習した英会話の教えるところにより“May I have 5 tokens?”と言ったに違いなく、その場合は、発音のまずさから、問い質され、おたおたしたに違いになかった。

赴任した会社はマンハッタンの正にど真ん中のGrand Central Stationの真上に建てられたPANAMビルにあったから、地下鉄はTimes SqでShuttleに乗り換えてというものであったが、表示は読めるから迷うようなことはなかった。会社は42階にあったから高層階用のエレベーターで生まれて初めての高層階に降りると、会社の受付にいた大柄の女性がにこやかに迎えてくれたものの、何やら山門に構えている仁王像を想起した記憶がある。

社長に着任の挨拶に行った。社長のその時の話は記憶にないが、社長の肩越しに見えた北に真っすぐ延びているパークアヴェニューの美しさは今も思い出せる。自席はビルの南側であったから、クライスラービル、エンパイアステートビルが、遠くには自由の女神像、さらにベラザーノ・ナロ

ウ・ブリッジが見渡せ、下をみると車が整然と交差して走る様は将にジオラマをみているようであった。

用意されていた机は日本では窓を背にそれで權威を示すような部長の机でないかと思えるほど大きく、そばに置かれていたゴミ箱(Trash box)は正に丈の長いバケツを思わせた。これから私の部下になる中年の女性がにこやかに迎えてくれたが、彼女を含め、周りの現地採用の社員たちには、私は少年のように見えたのではないか。なにもかもが大きかった。

旅行や観光で来たのではないから、いつまでもホテル住まいをするわけにはいかない。

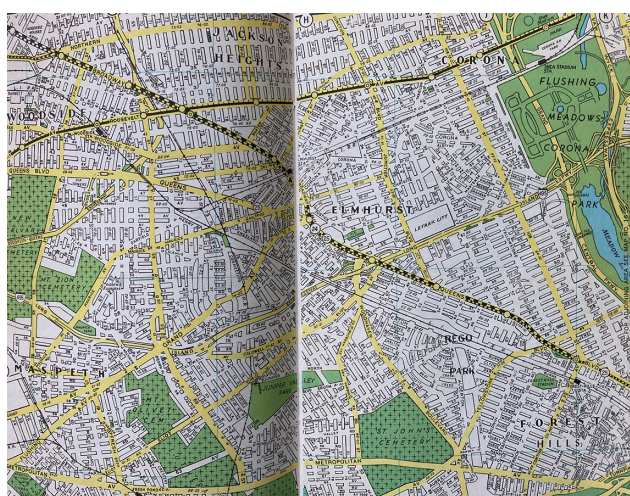
住居を決めねばならない。先輩の指示は「どうせ、1年間は独り身だから、部屋を借りるのだ。日本流に言えば、賄いのつかない下宿だな。新聞の広告を見て探す。」

一緒に探してやろうなんて雰囲気は一切なく、早くも放り出された感じであった。そして「こういうやつだよ。」と言って示されたのは、NY Timesの最終ページあたりにあった、いわゆる三行広告。「Room furnished \$xx/week, Jackson Heights, 212-XXX-1234」というようなもの。

現物を提示しようと思いNY在の友人に最近の新聞から写真を撮ってメールで送る様に依頼したところ、「そんなものは無いよ。」との返事。彼はNY Timesは読まないのかと思ったが、弁護士の彼がそんなことはないのではと思って気付いた。己の知識のトンチンカンさである。PCのメールで依頼し返信メールに写真を添付してと今の通信環境を利用しながらも、一方では今でもそのよう三行広告があると思っていたことである。己がその三行広告を利用していた時は、インターネットはおろか携帯電話も存在しなかったから、そのような広告方法であったのだが、今の情報取得はネット検索によるのが普通のことではないか。三行広告のような情報は、ウェブサイトに掲載されていて、それを検索することになっているに違いない。試しにPCで検索してみた。「NYで部屋を探すには」があるではないか。そのようなサイトがいくつも出てきた(例えば、MixB等)。しかも日本語で、写真があり、三行どころではない物件詳細がみられる。将に時代錯誤にある己の今を知らされた。

さて、脱線したが、当時に戻ろう。三行広告の最後の数字は電話番号で、街の不動産屋が仲介していることもあったが、大抵は自分の家の部屋を貸すというもので個人の電話であった。物件を見に行くには、その住所を聞くことになるが、赴任して間もない身ならば、土地勘が無く、車の運転もすぐには無理だから、通勤が便利な公共交通機関を使うことになるから Street と Avenue の記載のある地図を買い、更に地下鉄の路線図のあるいわゆる Subway Map を案内所で入手し電話を前にして構え、住所を聞き、地図と路線図で行けることを確認して訪問のアポイントを取り付ける。

住所の表記は住宅が面している道の xx 番とい



うもので、道も基本的に Avenue と Street が十字に交差していたから、住所さえあれば迷うことはなかった。

今は、Google の Map でアドレスを入れて検索すれば、直ちに表示され、その建物の外観さえ見ること出来るから、上記の対応は今の若者が理解するのはかなりの想像力が必要だろう。

部屋を見て気に入ればそこで賃料が週単位なら 1 週間分の、月単位なら 1 か月分の賃料に加え、日本流に言えば敷金に当たるものとしての、セキュリティ・デポジットとしてさらに 1 回分を加えたチェック（小切手）を切って部屋を借りる交渉は終わりであった。身元の保証等をどうしたのかは記憶がない。今思えば自宅の部屋を貸すのに、突然あらわれた外国人の素性を懸念しなかったのか不思議な気がする。個人情報保護ということが今のように厳格ではなかったから、小切手をたどればそれなりの情報が入手出来るということであったのかもしれないが、そもそものどかなことであつたと思う。

私が借りた部屋は、三階建ての家の三階部分にあった二部屋のうちの一つで、部屋の外にあったシャワーとトイレそして小さなキッチン（キチネットと言った）をもう一つの部屋の借り主と共有するというもので、シェアという分類かもしれないが、両方で利用するようなラウンジのようなものは無かったから、将に学生時代の下宿に近かった。部屋は furnished でベッドとドレサーと机と椅子があったから、入居したその日から生活は開始出来た。入居してすぐやることは、電話の契約であった。当時の日本では、かなりの額の電話債券の購入が要請されていたが、そんなものは必要ではなかった。部屋には回線が切れてはいたが黒色の固定電話機があったから、回線契約をすることだった。携帯電話は無かったから、電話会社との交渉はどうしたのか記憶にないが、電話会社に出向いてということはしなかったから、恐らく階下に住む家主が電話でやってくれたのだと思う。家主は Stefanides というギリシャ系の米国人であった。